

十



西郷隆盛 第十一卷

孤島の巻

製函所	製本所	印刷所	発行日	発行者	発行所	定価	著者	書名
文京紙器株式会社	大口製本印刷株式会社	図書印刷株式会社	昭和四十年三月十五日	徳間康快	徳間書店 東京都港区芝新橋四の三四	三八〇円	林房雄	西郷隆盛 孤島の巻

乱丁、落丁ありましたらおとりかえいたします

林房雄©



林房雄

西郷隆盛

士

孤島の巻

西
鄉
隆
盛
／
目
次

孤島の巻***目次

第一章 月光***9

第二章 父と子***20

第三章 沖永良部島***37

第四章 新牢***56

第五章 春***66

第六章 睡眠先生***82

第七章 風聞***99

第八章 氷心 * * * * * 111

第九章 報国丸 * * * * * 125

第十章 謫居歳旦 * * * * * 142

第十一章 胡蝶 * * * * * 150

第十二章 血と死骸 * * * * * 163

第十三章 砲声 * * * * * 177

第十四章 茶と生糸 * * * * * 193

年表 * * * * * 222

挿絵・山崎百々雄／装幀・上口睦人

孤
島
の
巻

第一章 月 光

仲祐少年はふと目をさました。窓が明るい。もう夜明けかと思つたほど明るい月光であつた。少年は寢床の上に半身を起してじつと聞き耳を立てた。何も聞えなかつた。少年は目をこすつて首をふつた。たしかに物の破裂するような音を聞いたつもりだつたのだが……。

「なんだ、夢だつたのか」

そう呟いて、また寢床にもぐるうとしたとき、

「えいッ！」

はげしい気合とともに、物をたたきつける音が庭木の間に木魂を呼んでひびき渡つた。

少年はとび起きて帯をしめなおし、枕元の木刀をつかみ、足音を忍ばせて、縁側から庭に下りた。昼のように白い月光であつた。黒く染め出された榕樹カシノキの下蔭に、半裸体の大きな人影が立っていた。

「やッ、えいッ！」

木刀をふるつて木の幹をたたき一心不乱なその姿から、鬼気に似たものが月光を透して仲祐少年の胸に迫つて来た。

「西郷先生だ。真夜中に剣術の稽古をされている」

少年はぶるツと身ぶるいし、足音をしのばせて寝間にかえり、寢床の上に両手を膝においてきちんと坐り、「舜何人ぞや、われ何人ぞや」と心の中でつぶやいた。西郷先生に習った「言志録」の中の一句を思い出したのである。

『憤の一字は、これ進学の機関なり。舜何人ぞや、われ何人ぞや。まさにこれ憤なり』

西郷先生も発憤して大志をふるい起されている。発憤すれば誰でも英雄賢哲になれるのだ。昼は学問、夜は剣術……まるで牛若丸のようだな、勇しいな、俺もしっかりやるぞ、大いにやるぞ！

「仲祐、まだ起きていたのか」

障子の外で声が出た。木刀を片手に庭から上って来た吉之助が部屋の外を通りかかったのだ。

「はい、先生の木刀の音で目がさめました」

「そうか、それは気の毒だった。まだ夜中だ。寝るがよい」

「はい、先生のお姿を見て、憤の一字はこれ進学の機関という言葉がよくわかりました」

「なに、憤の一字……」

「はい、舜何人ぞやであります」

「ほう、それは……あつはつは、よかろう、寝るがよい、寝るがよい」

吉之助は笑いにまぎらせて、自分の部屋に帰って行ったが、少年の純真な心にくらべて、自分の混乱した心が恥ずかしかった。真夜中に木刀をふりまわしたのは、憤は憤でも鬱憤の方であったのだ。

つい数日前、吉之助は大島の木場伝内の手紙を受取った。手紙の使者は竜郷村の宮登喜であった。

大島の友人たちと愛加那の親類縁者の心をこめた贈物を独木舟に積みこみ、海を渡ってはるばる訪ね

て来てくれたのだ。

木場の手紙には、『大兄が大島を出発したのはつい昨日のように思っていたのに、ふたたび遠島とはまったくもって驚き入った次第である。如何なる事情があったかは知らぬが、自分らの見るところでは、大兄に失策があったとは考えられぬ。おそらく幕府の追求がきびしかったせいか、さもなければ藩内の因循家どもが奸計を弄して、大兄をおとし入れたのであろう。幕府の目からかくすためなら、住みなれて、妻子もおり、友人もいる大島に渡海させればよからうものを、殊さらに徳之島に流したところを見ると、やはり藩の内争の犠牲になったものと思えない。いづれにしろ、事件の真相を知らしてもらいたい。事情次第では、われわれにも覚悟がある』という意味のことを記してあった。

島に来て初めて受取った同志の手紙である。同じ憤りと同じ憂いにみちみちた筆つきで、心から自分の現在の身の上を案じてくれるのは涙の出るほどありがたかったが、同時に、忘れよう、忘れたいとつとめていた胸底の鬱憤に吐け口をあたえた形になり、心の均整がたちまち破れてしまった。喧嘩に負けて、涙をかくし、歯を喰いしばって家に帰って来た子供が、母や兄弟のやさしい慰めの言葉を聞いて、われを忘れてわっと泣き出す、あの気持である。

もちろん、吉之助は子供ではない。わっと泣き出したい気持になったというのは誇張であるが、「天を恨まず、人をとがめぬ」心境の中に自分を埋没して、世を忘れ、世に忘れられて暮したいと願う心が素焼の壺のように壊れてしまったことは事実であった。

答えようか、答えまいかと迷う気持も長続きせず、わが冤罪えんざいを人に訴えたい心が先に立って、弁明の返事をしたためた。

『当月十一日付の御懇札、同二十三日朝、相とどき、ありがたく拝読仕候。実になつかしく、繰返し巻返し候。私かく相成り候なりゆきは、決して申上げざる考えに御座候えども、如何ような御疑惑も計りがたく、御安心もなりかね候ことと、よんどころなく、委細申上候間、御一読後は丙丁童子に御与え下さるべく候』

読んだら焼き捨ててくれという意味であつた。

『大島に居たころ考えていたこととは雲泥うんでいの相違で、鹿児島鹿児島の城下は群小勢力が割拠し、鬭争し、まったく手のつけようもない有様であつた。しばらく静かに観察していたところ、藩の現状はまさに少年国柄を弄すといった姿で、事々物々すべてむやみな事ばかり、藩政府はもちろん、諸官一同、疑迷困惑して、為すところを知らず、志は善意であつても、實際の処置にはうとく、本人は君子のつもりであつても、行ふことははなはだ下劣下賤で、俗人にさえ笑われることばかりだ。

いわゆる誠忠派と自称している連中は、今まで低い地位に屈していた者が、急に伸びたので、ぼつと上氣してしまい、一口に言えば、世の中に酔って逆上してしまつた有様。口に勤皇とさえ唱えれば、それだけで忠良な者だと自惚れてしまい、しからは現在どこから着手すれば勤皇になるのかと、その道筋を問いつめると、まったく訳もわからず、藩内の状勢の大体さえも判断がつかず、日本全体の大勢もまったく知らず、幕府の形勢も存ぜず、諸藩の事情もさらに弁わきまえず、しかも天下の事に尽そうというのは、実にめくら蛇におおじずで、手のつけようもない次第である』

という書出しで、大島を出発してから、ふたたび遠島に廻せられるまでの事情を細大洩らさず、半紙二十数枚にわたって書きしたため、森山新蔵の自殺と田中河内介たなかかわちのすけ父子殺害の事にも言及して、

『私心をもって天朝の人を殺害したことは、実に遺憾のことである。こんなことをしては、もう二度と天下に向つて勤皇の二字を唱えることはできない。薩摩の勤皇もこれかぎりの芝居であつて、もう見物人もなかるう』

大原三位が勅使となり、島津久光がこれを警衛して江戸に下向したというが、それではとても老獺ろうたがひな幕府とは太刀打ちできない。いまは勅使下向の結果も判明していると思うが、こんな遠海にいては事情もわからず、残念この上もないが、あきらめるより仕方もない。

『自分も大島にいた頃は、今日か明日か赦免しやめんを待っていたので、痼癢しやんも起り、一日一日が苦であつたが、今度は徳之島から二度とは出まいとあきらめていたから、何の苦しみもなく、安心なものだ』と書いたが、それでもまだ胸の鬱憤は晴れず、さらにつづけて、

『もしも国内が大乱に及ぶようなことになったら、その時は何としても帰国するつもりであるが、日本が平静であれば、たとえ御赦免の沙汰があつても、滞島を願ひ出るつもりでいる。骨肉同様の人々をさえ、事の真意も問わずして罪に落し、また朋友もことごとく殺されて、何を頼りにしていいものか。』

自分には老祖母が一人あつて、こればかりが気がかりであつたが、大島より帰国した時までは存命で、こんな嬉しいことはなく、その後大阪より帰つて来たときに死去したが、自分の目で見送つたのも同様であるから、もう何も心がかりのことはなくなつた。

つくづく世間のことを考えると、とても自分のような者の力で、どうにかなるといふ形勢ではない。もう馬鹿馬鹿しい忠義立ては取止めた。孤島の民となつて暮すつもりだから、どうぞお見かぎり下さ

るべく候』

筆にまかせて書き捨てた。

いくらか胸のはれたような気もしたが、苦い後味が残った。事件の真相を、私心を混えず公明に書きしるしたつもりであるが、やはり弁解は弁解である。自分が正しかったことを証明するためには、人の非を挙げなければならぬ。いっそ、このまま焼き捨てようかと考えたが、名も知れぬ孤島の寒村で、いっどんな事故や病気で死んでしまいかわからぬ身の上だと思ふと、せめて、友人同志の一人や二人には事の真相を知ってもらいたかった。

書き流したまま読みかえさず、そのまま封をして宮登喜に託した。

「愛加那のことは如何いたしましたしょう」と、宮登喜は尋ねた。

「さて、それは……いつ島替えになるかも知れぬ身の上だから、この島には来ないようにと言ってもらおう」

「島替えになったら、御一緒にお移りになればよろしいではございませんか」

「いやいや、かえってそれは女子供を苦しめることになる」

「旦那様は、坊ちゃまのお顔を見たくはございませんか」

「見たい」

「それに、もう一月もすれば、次のお子様が生れます……。お呼びになった方がよろしい。愛加那もどんなに喜ぶことかと思ひます」

妻にあいたくない良人はなく、子の顔を見たくない親はない。菊次郎は大きくなったことであろう。半年前に別れた時には、ただの乳呑児であったが、もう立つて歩いて、かた言くらいはしゃべるかもしれぬ。愛加那はいわゆる島妻であるが、名前はどうでも、自分にとってただ一人の妻であることは間違いない。とかく心の弱りがちな今日のごろ、妻と子が傍にいてくれたなら、どれだけ日々の暮しが明るくなることか！

それはわかっているが、しかし、自分はまだ罪名の決定しない身の上である。久光の命令次第で、場合によっては命まで召上げられてしまうかもしれぬ。久光はいま、勅使を警護して江戸に下り、中央経営のことに夢中になっているらしいが、どうせ荷の勝ちすぎた芝居であるから、いずれ幕府に背負いなげを喰って、失意の境涯で国許に引揚げて来るにちがいない。国許に帰れば、自分の失敗を人のせいにして、思いがけぬ敵罰を自分に加えないともかぎらぬ。あり得ることだ。鬱憤ばらしの復讐は、器量の小さい暴君が得てしてやりたがることだ。

もしもそんな事の起った場合に、愛加那母子を知らぬ他郷の徳之島に呼び寄せておいたなら、その日から母と子は路頭に迷う。大島においておけば生れ故郷だ。両親もおれば、親族もいる。桂右衛門にしても木場伝内にしても、任期が終って大島を引揚げるまでは、親身の世話をしてくれることであろう。呼び寄せてはならぬ。一時の情にひかされて母と子の運命をあやまってはならぬ、と決心して吉之助は宮登喜のすすめをはっきりと断った。

そのかわりに、桂右衛門に宛ててくわしい手紙を書き、愛加那母子の身の上をくれぐれも頼んで、『逢いたきは山々なれど、敢て相逢わざる心情御賢察下さるべく候。なおこのたび出生の子供はかな